

一般選抜（C日程）入学試験問題

国語

注意事項

1. 願書提出時に、この試験科目の受験を申請していない人は受験できません。
2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
3. 解答は解答用紙の解答欄にマークしなさい。
4. 解答用紙にある「マーク記入例」と「記入上の注意」をよく読みなさい。
5. この問題冊子は、十六ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権処理中のため、公開できません

著作権処理中のため、
公開できません

著作権処理中のため、公開できません

(サトウタツヤ『心理学の名著30』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変、段落の変更・省略などを施した箇所がある。)

問一

傍線部ア～ウの漢字の読みとしてもつとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 ア 1、イ 2、ウ 3)

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|-----|-------|-----|--------|-----|-------|-----|--------|-----|------|
| ア | 遡 | [1] | よみがえ | [2] | もど | [3] | さかのぼ | [4] | たてかえ | [5] | ふりかえ |
| イ | 鋭敏 | [1] | しゅんびん | [2] | えいびん | [3] | せつびん | [4] | かんびん | [5] | えいせい |
| ウ | 無頓着 | [1] | ぶとんちく | [2] | むかんちやく | [3] | ぶとんつく | [4] | むとんちやく | | |
| | | [5] | むこんちく | | | | | | | | |

問二

傍線部 a～c の片仮名の太字箇所を用いる漢字としてもつとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 a 4、b 5、c 6)

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-------|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
| a | ホウカイ | [1] | 崩 | [2] | 放 | [3] | 報 | [4] | 萌 | [5] | 奉 |
| b | トクイ | [1] | 意 | [2] | 位 | [3] | 異 | [4] | 威 | [5] | 違 |
| c | カイシヤク | [1] | 尺 | [2] | 杓 | [3] | 积 | [4] | 癩 | [5] | 勺 |

問三

I、IV に入るものとしてもつとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 I 7、II 8、III 9、IV 10)

- | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| I | [1] | 血液型 | [2] | 身分 | [3] | 家系 | [4] | 適性 | [5] | 個性 |
| II | [1] | 消極性 | [2] | 積極性 | [3] | 外交性 | [4] | 対称性 | [5] | 外向性 |
| III | [1] | 感覚 | [2] | 環境 | [3] | 体質 | [4] | 性格 | [5] | 状況 |

- IV [1] 積極 [2] 攻撃 [3] 破壊 [4] 奔放 [5] 猛威

問四 二重傍線部 A・B の意味としてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号 A || 、B ||)

A 概念

- [1] ある物事を大まかにまとめた意味内容
- [2] ある物事の理想的な状態を示した意味内容
- [3] ある物事の限定された時代の意味内容
- [4] ある物事を具体的に説明した意味内容

B 矛盾に見えるかもしれない

- [1] つじつまが合わないと考えられるかもしれない
- [2] 対照的であると考えられるかもしれない
- [3] 理解し難いと考えられるかもしれない
- [4] こじつけであると考えられるかもしれない

問五

に入る接続語の組み合わせで、もっとも適切なものを解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号)

- [1] ア そして イ また ウ まず エ では
- [2] ア けれど イ また ウ しかし エ そして

問六

破線部①「血液型性格関連説」について、本文の内容と合致しないものとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

- [3] ア そして イ けれど ウ そのうえ エ では
- [4] ア けれど イ そして ウ しかし エ そのうえ

(解答番号

14

)

[1] 血液型は、二〇世紀初年に、前世紀の科学技術の到達点として発見され、ランドシュタイナーの顔が通貨の顔として起用されているように、血液型の発見は、輸血の成功率を飛躍的に上昇させ、多数の人がその恩恵に浴した。

[2] 誰もが何にでもなれる身分制度の制約のない時代が到来して、初めて性格という概念が必要とされるようになった。

[3] 性格というのは、血液型よりずっと前からあったとは言いきれず、一般大衆にとつての性格の概念は、二〇世紀に入つて必要とされるようになった。

[4] 血液型は、発見された年が明確であるのに対し、性格というものは、二〇世紀半ばを過ぎて広く認められたと推測できるものの、いつから存在するかは言いきれないため、血液型と性格の関係を考えることは不可能である。

[5] 性格というものが人々の役に立つのが、ようやく大正末期になってからであるということは、江戸時代において、儒学・医学部などの学問に携わるためには、家系が左右されたという社会の状況を視野に入れて考えるとよく分かる。

問七 言文一致体の先駆けであり『小説総論』『浮雲』などの作品を発表した作家は誰か。もつとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

15

)

- [1] 幸田露伴 [2] 国木田独歩 [3] 泉鏡花 [4] 二葉亭四迷 [5] 森鷗外

問八 「中途半端で何の役にも立たないこと」を意味することわざとして、もつとも適切なものを解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

16

)

- [1] 鬼に金棒
[2] 帯に短したすきに長し
[3] 負うた子に教えられる
[4] 過ぎたるはなお及ばざるがごとし
[5] 暖簾に腕押し

問九 慣用句の空欄 ① く ⑤ に入るものとして、もつとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号

①

||

17

,

②

||

18

,

③

||

19

,

④

||

20

,

⑤

||

21

)

問十

次の同音異義語の組み合わせで、もつとも適切なものを解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号

あ

22

い

23

)

- ① を正す
- ② を張る
- ③ が熟す
- ④ をすすめる
- ⑤ が出る

- [1] 機
- [2] 煙幕
- [3] 精
- [4] 腰
- [5] 威儀

あ キセイ

① 故郷に キセイ する。

② キセイ 品を買う。

③ 交通 キセイ する。

④ キセイ をあげる。

- | | | | | |
|-----|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| [1] | <input type="checkbox"/> ① 帰省 | <input type="checkbox"/> ② 既生 | <input type="checkbox"/> ③ 規生 | <input type="checkbox"/> ④ 奇声 |
| [2] | <input type="checkbox"/> ① 寄生 | <input type="checkbox"/> ② 既製 | <input type="checkbox"/> ③ 規制 | <input type="checkbox"/> ④ 氣勢 |
| [3] | <input type="checkbox"/> ① 帰省 | <input type="checkbox"/> ② 既成 | <input type="checkbox"/> ③ 規制 | <input type="checkbox"/> ④ 寄生 |
| [4] | <input type="checkbox"/> ① 帰省 | <input type="checkbox"/> ② 既製 | <input type="checkbox"/> ③ 規制 | <input type="checkbox"/> ④ 奇声 |

④ ケントウ

① 競技で ケントウ する。

④ 神社に ケントウ する。

② 会議で ケントウ する。

③ 大体の ケントウ をつける。

[1] ① 健闘

② 検討

③ 見当

④ 献灯

[2] ① 健闘

② 見当

③ 賢答

④ 検討

[3] ① 健闘

② 検討

③ 見当

④ 献灯

[4] ① 拳闘

② 見当

③ 検討

④ 献灯

二
一
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

そもそも、先年、河津三郎祐通を討ちたりし工藤一郎祐経も、今度、左衛門尉になりて、先年押領せられたりし伊東莊を賜る上に、莊園数か所拝領し、随分の切り者にて御側去らず勤仕しける。かの祐通に男子三人あり。末子の御房殿は他所に養はれて、朝夕見馴れたることもなければ、外の兄弟のごとくしてうち過ぎぬ。河津が討たれし時、五つと三つになりし子どもは、一万、箱王とて母に添ひつつ、継父の曾我太郎祐信が許にあり。やうやく成人するほどに、父の敵祐経がことを人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知る。心の付きけるままに、いとど安からずぞ思ひける。頃は人皇八十一代安德天皇の御宇、養和元年辛丑、新玉の年立ち返り、一万は九つ、箱王は七歳にぞなりにける。

ある夕暮に、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前。父はいづくにおはしますぞや。誠やらん、父の御事は仏になりてましますとな。その仏はいづくにましますぞや。行きて拜まん。母御前も、いざ、させ給へ」と言ひければ、遙かに忘れたる来し方も今さら思ひ出だされて、消え入るばかりに思はれける。母、泣く泣く宣ひけるは、「あのⅠこそ、己らが父にてあれ」と心強くは語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王、重ねて申しけるは、「父御前は、誠やらん、『狩場より帰り給へる道にて、工藤一郎とやらんに射られて死に給ひぬ』と兄御前は語らせ給ふぞや。当時、鎌倉殿の切り者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとな。我らをも殺さんとや思ふらん。また、我らがこの里にありと知らずや過ぐらん」とおとなおとなしく語りければ、母より始めて女房たちまで皆、袖をぞ絞りける。

かくて、夏も過ぎ秋も闌けぬ。九月十三夜の月の隈もなかりけるに、兄弟二人、庭に出でて遊びけるに、五つ列れたる雁金の、南を指して飛びけるを見て、一万、申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼は交へざりけるは。五つ列れたる鳥の中に一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物言わぬ畜生までも、かくのごとし。我らは人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母は実の母なれども、Ⅱは実の父にてなきこそ口惜しけれ。我らが父をば

Ⅲと申しけんなる。父だにも世におはしますば、馬・鞍をも賜り弓矢をも持つて、今は思ふやうに物をも射歩きなん。我々より幼き者だにも馬・鞍・弓矢を持ちて物を射歩くことの羨ましきよ。これらの事ども思ひ続ければ、いつより今夜は

父御前の恋しくおはしますぞや」とて、袖を顔に当てければ、弟も小賢しく額を合せて泣き居たり。

一万が乳母の女房、これを聞きつつ、「あな浅まし。人も（1）聞け。いかに和上藤たち、夜も更くるに、さやうにてはおはしますぞ。疾く疾く入らせ給へ」と恐ろしげに言ひければ、二人の者は門外へ逃げ出でて思ふやうに飽くまで泣き、後に内へ入りにけり。その後は、二人の幼き者ども、我が身の程を知りぬれば、後れし父を慕ひつつ、語り合ふことまではなけれども、ただ目ばかりを見合せて袖をぞ濡らしける。いまだ十歳にも満たざる年の程に合すれば、哀れはこれらに留めたり。

或る時、兄弟は、竹の小弓・薄矧の小矢を取り添へて遠侍に出でて遊びけるが、明り障子のありけるに、二人立ち向ひつつ、あなたこなたへ射通して、一万、箱王に申しけるは、「我らもいつか成長し、和殿十三、我は十五にだにもなるならば、いかならん野の末、山の奥にてもあれ、親の敵祐経をかくのごとく差し合せて射取りつつ、後はともかくもなりなん。和殿も弓よく射習へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあんなるぞ」と言ひければ、弟もうち領いて領掌しけり。「年ばへには恐ろしきことかな」と人々思ひけるあひだ、或る人、一万が乳母にこの由を語りければ、大きに驚きつつ母にこの由申しければ、母も大きに仰天しつつ、二人の子どもを呼び寄せ、泣く泣く語られるは、「誠か、己らはさも恐ろしき世の中に謀叛を起さんと議し合ふなる。あな、恐ろしや。こは、いかにせん。もし人の耳にも入りなば、よかるべきか。汝らよくよく聞け。己らが祖父伊東入道殿は、当鎌倉殿の若君千鶴御前とて三歳になり給ひしを、松川が淵に沈め奉りし故に御敵となつて、先年、伊東の館において失はれ給ひぬ。己ら、かかる謀叛人の孫なれば、敵の左衛門尉、上の御敵に申しなしで失はるべし。その時、千度悔い百度悲しむとも叶ふべきか。その上、汝らが鎌倉へ召されし時も、曾我殿嘆き申して留めたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戦にうち負けて杉山へ入らせ給ふ時、梶原平三景時と曾我殿と二人心を合せて助け奉りし故に、駿河国八郡の太田に成されし、その御恩をば皆進らせ上げつつ、『二人の幼き者どもを助けて賜らん』と申しければ、鎌倉殿憐れませ給ひて、『それほどの志ならば、二人の子どもをば祐信に預くるぞ』と仰せ下されける故にこそ、汝らは安穩にて今まで希有の命をば持ちたれ。それにつけても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ尽すべきか。恩を知ることとは、鳥類・畜類までもそのいはれありとこそ聞け。いはんや汝ら人倫においてをや。かかる大恩をば、いかでか報ぜざるべきや。然るを、かへつて曾我殿に嘆きを与へんとすること、かへすがへすも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、

速やかに謀叛の思ひを留むべし。就中、鎌倉殿の御耳に達するものならば、しばらくも安穩にてあるべきか。命があつてこそ謀叛をも起すべけれ。必ずその心、あるべからず」と口説きたてて戒められければ、二人の子ども、目と目を見合せて顔うち赤めて立ちにけり。それより後は、人の聞かぬ所にては内々談議しけれども、人目に顕はれて語り合することもなし。
(『曾我物語』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変・削除を施した箇所がある。)

【注】 蘭け…季節がその盛りを過ぎ、終わりに近づくこと。

和上臈…貴族の子女などに対して親しみを込めて呼びかける語。

薄矧…矢羽をススキで接いだ弓。

遠侍…母屋から離れた中門脇などに設けられた警護の武士の詰所。

差し合せて…心を一つにしての意。

領掌…事情をくんで承知すること。

生々世々…生まれ変わり死に変わり経る多くの世。永遠。

口説きたてて…繰り返して言い立てること。

問一 (1) に入るものとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

24

)

[1] ぞ [2] か [3] や [4] こそ [5] なむ [6] やは

問二 波線部 a、b の敬語の敬意の方向について、もっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

なお、同じものを繰り返し用いてもよい。

(解答番号

a ||

25

、 b ||

26

)

- [1] 兄弟から乳母の女房への敬意。
- [2] 作者から乳母の女房への敬意。
- [3] 乳母の女房から兄弟への敬意。
- [4] 母から鎌倉殿への敬意。
- [5] 母から曾我殿への敬意。
- [6] 作者から母への敬意。
- [7] 母から箱王への敬意。
- [8] 箱王から母への敬意。
- [9] 一万から母への敬意。

問三

傍線部 i、ii の意味として、もつとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(解答番号

i ||

ii ||

)

i あな浅まし。

- [1] まあ、痛々しい。
- [2] まあ、驚いた。
- [3] まあ、浅はかな。
- [4] なんと気の毒な。
- [5] なんと恐ろしい。

ii 後れし

- [1] さきだった
- [2] 出家した
- [3] 後夫である
- [4] 安否不明の
- [5] 未だ帰らない

問四

I Ⅲ に当てはまる語の組み合わせとして、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

29

)

- | | | | | | |
|-----------|--------|---------|-----------|--------|---------|
| [1] I 曾我殿 | II 河津殿 | III 曾我殿 | [2] I 河津殿 | II 曾我殿 | III 河津殿 |
| [3] I 曾我殿 | II 曾我殿 | III 河津殿 | [4] I 河津殿 | II 河津殿 | III 曾我殿 |
| [5] I 曾我殿 | II 曾我殿 | III 曾我殿 | [6] I 河津殿 | II 河津殿 | III 河津殿 |

問五

一万と箱王が生き延びられている理由として、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

30

)

- [1] 曾我殿の協力によって山奥の里に逃げ延び、二人の住んでいる里が鎌倉殿に知られていないから。
- [2] 曾我殿が、与えられた恩賞を全て返上して、箱王と一万を助けてほしいと鎌倉殿に頼んだから。
- [3] 幼い兄弟のことを鎌倉殿があわれに思い、人里離れた場所に住むことを条件に命は助けたから。
- [4] 父の河津殿が自らの命と引きかえに、一万と箱王の命は助けてくれるよう鎌倉殿に頼んだから。
- [5] 曾我殿が、一万と箱王を自宅にかくまい続け、その存在を鎌倉殿に知られないようにしたから。

問六

次のア～オの文について、本文に合致するものを○、合致しないものを×としたとき、その正誤の組み合わせとして、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

(解答番号

31

)

ア 一万と箱王は、父の敵が祐経であることを母から聞いて知った。

イ 箱王は父のことについて母に尋ねたが、一万は尋ねていない。

ウ 母から謀叛について諭されてからは、兄弟は人目のあるところで相談しないようにしていた。

エ 河津三郎祐通には三人の男子がいたが、全員が継父の曾我太郎祐信のところで暮らしていた。

オ 曾我殿は、箱王と一万をかわいがり、ともに馬・鞍・弓を持って物を射て歩いたりしていた。

[1] ア○ーイ○ーウ×ーエ×ーオ○

[2] ア○ーイ×ーウ×ーエ○ーオ○

[3] ア○ーイ○ーウ×ーエ×ーオ×

[4] ア×ーイ×ーウ○ーエ○ーオ×

[5] ア×ーイ○ーウ○ーエ×ーオ×

[6] ア×ーイ×ーウ○ーエ○ーオ○

問七

次の文の括弧に当てはまるものとして、もっとも適切なものを解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。なお、『』には作品名が、()にはジャンル名が入る。

(解答番号

ア||

32

イ||

33

)

『曾我物語』のジャンルは(ア)である。『曾我物語』と同時期に成立した同ジャンルの文学作品には『イ』がある。これらの作品には、横死した人物への鎮魂が込められているとされる。

[6] [1]
義経記 軍記物語

[7] [2]
将門記 作り物語

[8] [3]
打聞集 擬古物語

[9] [4]
十訓抄 歌物語

[10] [5]
歎異抄 海道記